

てのヘブライ的思考を語るには私の力量では出来ない。が、或る研究者によると「(神)」という主体が先ず存在して、それが働く、と考えられているのではなく、むしろ、働くことのうちに主体が自らを啓示するのであって、主体・即・働き、働き・即・主体なのである。しかし、それはたんに現象的作用の内に神が内在すると理解されてはならない。むしろ神的働きは現象の過去の性格とは全く異なった意味の働きである。それは常に未完了形を保つところの、将来的・創造的働きである」(有賀鉄太郎著作集四「キリスト教思想に於ける存在論の問題」一八九ページ)と、この問題についての研究成果が記されてある。

なんだか、難しく、堅苦しい表現であるが、とにかく旧約聖書の神は「成る」と「有る」とが一如になったようなもの、だと有賀氏は言う。もっと簡単に言えば聖書の神は「動」であると言ってもよいのではないかと思う。

×

×

私には、専門的で、難しいことはわからないが、神は自動車や犬等を見るように、人が対象化して見るもの、捉えるものではなく、「動」として、「命のたぎり」として、言わば掴みどころがない「無」そのものとして頂いている。

無とは「ない」ということではない。それでは「有無」の「無」になつてしまう。言うならば「有無」を超えた「無」である。とにかく神は掴みどころがない絶対的な命その事、動その事で

あると言える。だからこそイエスは、動としての神の命の及ぶところを「神の国」（神の支配）と言われ、次のように提示された。

神の国は、見える形では来ない。「ここにあり」「あそこにある」と言えるものではない。実に、神の国はあなたがたの内にあるのだ。

—ルカによる福音書一七章二一節—

神の「成る」という動としての命は、言うならば人そのものの内、人そのものの命として動である、というのである。それはある形に限定され、自己限定したり、自己主張したり、他者否定をするような一つの存在ではない。

×

×

このように神について思いめぐらし、もう一度あの「親切なサマリヤ人」についてのイエスの提示に目をやるなら、「親切なサマリヤ人」を、あのように突き動かしたその命の発露が見えてくるように思う。

親切なサマリヤ人は、他律に立つたのでない。神が命じるから。神の御意思にかなうことだから。人間として相応しい行いだから。聖書にそのように行えと書いてあるから。……などという他から律せられて、倒れている敵であるようなユダヤ人を助けたのではない。また「親切なサマ

リヤ人」は自律に立ったのではない。自分の善意で行ったのではない。自分の価値観、自分の感情、自分の……。自分の理性や悟性や感情や意思だけで自分はそのようにすべきだ、と判断して、倒れているユダヤ人を助けたのではない。

彼は、彼の却下で命している動、神の支配の動、まさに命のたぎりそのものに自己の内側から突き動かされ、命のたぎりになって倒れているユダヤ人に手を差しのべたのである。

半殺しにされ、倒れているユダヤ人を見たサマリヤ人は、その人を見て憐れにおもい、近寄って傷に油とぶどう酒とを注ぎ……。自分のろばに乗せ、宿屋へ連れて行って介抱した。そして、明日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に言った。「この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います。」さて、あなたは、この三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。……。そこでイエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

×  
×  
— ルカによる福音書一〇章二五節以下 —

キリスト教信仰は、聖書的観念の単なる受容ではない。ましてや、その文字面を形式的に真似ることでもない。どの人の存在の根本にも無条件に動として躍動する創造的な命のたぎりの事実

に、開眼することが肝要である。そのとき、その人は人間になるのだ。その現場が「創造における自然」なのである。この様子をパウロは「もはや、生きているのは私ではない。キリスト(命のたぎり)がわたしの中で生きている」「私にとって生きることとはキリスト(命のたぎり)です」と言った。

×

×

「初めに、神は天と地とを創造された」と聖書は冒頭に記している。これをどのように読み、どのように解釈するか、ということは古来多くの研究者によって論じられてきた。

天地は神が創造したのだ、と言う聖書証言を字義どおりに解釈し、またこれを科学的に証明しようとするので、かえって聖書証言の価値を貶おとしめてきた。天地創造の記事をそのまま字義どおりに是認するとき、近代科学の立場から否定されることになり、所謂「宗教と科学」との闘争、宗教と科学との対立が生じるのは当然のことである。

しかし、聖書の創造の証言を、天地の創造と存在についての宗教的な信仰告白として受け取るなら、宗教と科学との対立は生じることはない。なぜなら、宗教的な次元における創造と科学に於ける創造についての視点が違うからである。

宗教と科学の視点の次元が違うということは、二つの異なった見方がある、という意味ではない。その違いとは、見えるものと見えないものとの違いであり、現れ出たものと現れ出ないもの

との違いということである。

×

×

現れ出たものの成り立ちを聖書的な観念や文字面にある証言でもって解釈し統一化、絶対化するなら近代的な科学知識による説明や解釈と対立することは、先にも述べたとおり当然のことである。このような、現れ出たものの成り立ちについての宗教と科学との対立はコペルニクス以来久しく続いて来た。このような状況は、科学にとつても、宗教にとつても本来の意味において不幸なことである。というのは、科学と宗教とは本来対立するものではなく、その両者がそのまま「創造における自然」にすぎないものなのである。

×

×

たしかに科学と宗教はその次元において違う。しかし一方において科学と宗教とは同じ次元のものなのである。そしてその決定的な違いは宗教が一で科学は二であるという意味において一つだということである。これについては後でご一緒に考える。

×

×

「科学的」に見る、考えるとは、ものを対象化して私が見る、考えるということである。つまり私という主観の立場からそれという対象化されたものを、客観的に分析し、客観にある法則を見出し、そのものを説明するという見方、考え方が「科学的」ということである。さらに、こ

のようにして見出し出した法則に従ってものごとを構成することを「技術」ということは周知のことであり、その科学的技術文明によって人類は多大の恩恵を受け、極めて便利と幸福を享受しており、今後ますます科学は発達していこうとしている。

しかし、一方において科学技術の高度な発達は環境汚染を生みだし、所謂「公害」となって人間は「しつぺ返しを受け」つつあり、それは地球存続の危機をももたらすのではないかという不安を、私たちに予感させるほどになっている。しかし、科学文明はそのような不安をも、更なる科学技術で克服しようとしているが、そのような事態に、人間は期待しつつも、より深く強い不安を抱きつつあるというのが現代状況である。

高度に発達した「科学技術」に対する不安を、科学技術は悪だと考える方向に結び付けてはいけないと思う。一切の科学技術文明を否定し、拒否することで人間の安心を得ようとしてはならない。むしろ、そこに現れ出ている不安を、「大いなる問い」として受け取ろうとすることこそが大切である。つまり高度に発達した科学文明がもたらす状況そのことが、大いなる問いを人間に突きつけているのである。その問いに対して人間がどれほどの深さで答え得るか、ということが今日の大問題なのである。

×

×

現実の状況はいつも「問い」を含んでいる。しかし一方に於いて「問い」は「答え」をすでに秘めているのである。にもかかわらず、多くの人はそれに気づいていない。そこでは、問いと答えとは同時ではない。が、問いの中に答えを秘めているという意味では、問いと答えとは同時なのである。しかも、答えが問いを生み出しているのである。この結論は、少しややこしく思うが、実は人間存在、存在一般に於いては事実なのであって、決して理屈のことではない。いわば、これは「創造に於ける自然」なのである。以下、私に出来る限りの内で要点だけをおさえて語ってみたい。

×

×

経験的な現実世界の成り立ちは、一口にいつて相補性である。つまり物事は互いに補い合う関係において成り立っている。例えば一本の樹木がそこに生えているということは、大地があり、太陽の光があり、雨が降り、空気があり等々のことがらとの関係において、はじめてその樹木は樹木としてそこに在る事が出来るのである。この場合、樹木はただそれらから受けるだけの関係ではなく、太陽の光を受けて光合成し炭酸同化作用を行い、結果として酸素を放出して空気を浄化してくれる作業を行っている。しかも光合成も光合成菌の働きによるのだと知るとき、物事の存在の深部にいたるまで、すべては相補関係において、それ自身が出来事として成り立っているのである。このことは私たちの生体の成り立ちにおいても同じである、例えば胃は胃だけで在る

のではない。胃が胃である為には腸があり、心臓があり、他のすべての臓器との関係で、はじめは胃は胃であり得る。この事實は宇宙全体の構造にも及び、一つの星の存在がその重力または引力との関係において私の存在に深く関わっているのである。まさに宇宙全体が相補性の関係のもので「それがそれ」として成り立っているのである。この事實は、主観的でも客観的でもない。観念が生み出す幻想でもない。それは主・客を超えた、まぎれもない事實である。パウロはこの相補関係を体において次のように提示している。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が「わたしは手でないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が「わたしは目でないから、体の一部でない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だつたらどこで聞きますか。もし全体が耳だつたら、どこで聞きますか。

だから多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かつて「お前は要らない」と言えず、また頭が足に向かつて「お前は要らない」とも言えません。それどころか、体の中で他よりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

神は、見劣りする部分を一層引き立たせて、体を組み立てられました。それで体に分裂が起らず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、

一つの部分が尊ばればすべての部分が共に喜ぶのです。あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分です。

—コリントの信徒への手紙Ⅰ十二章十二節以下—

すべての個物はそれがそれでありつつ、その実、それ以外のものとの相互の関わり、つまり相補性の関係に於いてそれ自体として成り立っているのだということを、科学は明確にした。そのことが科学自体、事物の存在が秘めている深部への関心を深め、科学を哲学する科学哲学を宗教的なものへ接近させつつあるといえる。

それにしても、物事の存在の様態が相補性に於いてそれであり得るということには、「何故ですか」という問いは成り立たない。例えば、太陽と地球との距離が、地球の気象条件を決定し、それ故に地球が地球であり得るのは「何故ですか」とは問えないのと同じである。科学は、地球がそこにあることの結果を説明するだけであり、それが科学の限界である。その意味では、そのものが、そこにそのように在るということは、「大きな問い」を秘めている。言うならば、答えは、人間の側にはないのである。それは人間には不思議なことなのである。つまり人間が思い、議論が不(できない)世界なのである。だから、存在はそれ自体、不安を覚えているのだ。しかし、

なぜ存在はそれ自体に不安を覚える事ができるのだろうか。そのような不安は人間だけが覚えるのである。このところを今少し掘りさげて行くと、**「創造における自然」**が現成してくる。

イエスは言われた。

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。

—ヨハネによる福音書十五章十二以下—

イエスの言葉を私たちはどのように受け取ればよいのだろうか。あなたはどのように受け取られるのか。イエスの言葉を受け取るとは、イエスの言葉を解説することではない。また、テキストとしての福音書を聖書学的に研究することでもない。また、イエスの言葉を即神の言葉または生の絶対基準なる律法として受け取ることでもない。そうではなく、イエスがその言葉と行いに於いて証示している生の根源に気づくことが、イエスの言葉を受け取るということである。

イエスの言動は生の根源から発せられ、その根源に人を気づかせ、かつ根源へと導くものである。しかし、人は「聞くには聞くが決して悟らず、見るには見るが、決して認めない。いつもそ

の心は鈍く、その耳は聞こえにくく、その目は閉じている。」（マタイによる福音書一三章一四節）

イエスが証示する生の根源を聞かないままで聖書を読み、イエスについて語り、教義を信ずるだけでは、それは所謂「キリスト教」をヤツテイルだけにすぎない。いずれにしても、大切な事は、生の根源から出てきた言葉を自覚的に受け取ることに於いて自らの生の根源に目覚めることである。

×

×

「人が友のために自分の命を捨てること、これ以上に大いなる愛はない。」とイエスは提示された。私たちはここで、立ち止まり考える。「わたしにできるだろうか」と。願わくばそうありたい。しかし、それは理想であり、現実にはできない、と思う。だが、そのように思うとき、その者は「宗教」の脅迫観念の民にはまり、魔にとりつかれたと言える。

人はいつも「出来るか、出来ないか」という思いにとらわれる。「出来るか、出来ないか」という発想は、人間の「我」の世界が作りだす魔である。「我」とは、自分の力と知恵とを確信するところから生まれてくる。そして、望ましい自分の姿を作り上げ、その作り上げた人間像に自分を近づけようとする。そして望ましい自分になるとき、彼は誇る。そして、望ましい人間になれなかった者を蔑む。一方、望ましい自分になれなかった時、彼は失望する。そして失望し

た者の「我」は、救いの神を立てて、その神の愛によつて望ましい自分自身にならうとする。

「我」の関心はどこまでも自分なのである。これが自我の実態である。彼にとつて神の愛も仏の慈悲も、所詮は自分自身の救済、望ましい自己実現の手段にしかすぎない。「わたし」が救われるためなら、何でもしましょう。何様でも信じましょう。」というのが自我の実態である。「出来るか、出来ないか」という自我の発想の内にはいつもこのような「魔」が潜んでいる。

×

×

「友のために自分の命を捨てること、これ以上の愛はない」というイエスの提示は、生の根源から出て来て、人を生の根源へ導き開眼させる、言わば根源語である。根源語とは、聞く者の誰もが無条件に「我」によらず素直に「そうです」と共感する言葉である。先に述べた「親切なサマリヤ人」についてのイエスの提示を思い出していただきたい。彼は、倒れている人を見て哀れに思い、近寄つて傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をした後、最後まで親切の限りをつくした。私たちは、彼と同じように自分が出来るか否か、を問うまえに、親切なサマリヤ人の行為に理屈抜きに共感を覚える。素直に共感を覚えたそこでは「我」は無い。共感を覚えたそれは「我以前」

×

×

「我」の主人は自我であり自分自身である。「我」の関心はひたすら自分の実現である。その

意味で「我」の有り様はエゴイズムである。エゴイズムは自分によって自分である、という原則に成り立っている。したがって、彼がどれほど謙虚で、自己犠牲的で信仰的に見えようと、さらに自分は罪人だと語っても、所詮はエゴイズムの虚構にしかすぎない。さらにエゴイズムの恐ろしさは、その自己の虚構性に自ら気づいていないことである。自覚的に虚構を演出するエゴイストは所謂悪人であるが、それと気づかずに虚構に生きつつその生を真実だと思ひ違いをしているなら、それは悲劇であり喜劇でもある。イエスはその代表的存在を当時の「パリサイ人」の在り方に見られ、次のように嘆かれた。

見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、「見える」とあなたたちは言っている。だからあなたにも罪は残る。

—ヨハネによる福音書九章四〇節以下—

さらに、イエスは彼らについて次のように語られた。

彼らは盲人の道案内をする盲人だ。盲人が盲人の道案内をすれば、二人とも穴に落ちてしまう。

—マタイによる福音書一五章二〇節—

パウロもパリサイ人についての確に批判した。

わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからです。

—ローマの信徒への手紙一〇章二節—

×

×

「友のために自分の命を捨てること」が「出来るか、出来ないか」という場に止まるなら、その人は「我」の世界の人である。彼は未だパリサイ人の世界に生きている。しかし、人間存在の根源は「我」の世界、「自我」の世界より深い。「わたし」なる者の根源は、「わたし」と「あなた」と「かれ」と「それ」と同時である。「わたし」なのである。その場では一切の分別ぶんべつは消えている。サマリヤ人が倒れているユダヤ人を哀れに思い手を差しのべたその場では「わたし」と「あなた」との分別は消えていた。その場は、「わたし」や「あなた」、「かれ」や「それ」等を超えて、しかもそれ等をそれ等たらしめている「大いなる命の『わたし』」と言うほかない命のたぎりとしての主体が働いているだけである。その主体の働きが姿をとって現成するとき

「愛」となる。まさに歴史的なイエスはその主体としての「大いなる命の『わたし』を生きぬかれた。だからその姿は愛となった。そのところから発語されると次のような言表となる。

イエスは言われた。わたしを見た者は、父(神)を見たのである。

—ヨハネによる福音書一四章九節—

したがって神は、白い衣をまとったスーパーマンとして天地の果てに居て、日夜働いているのではない。神は大いなる命の主体としての命のたぎりその事であり、その命の躍動は愛である。だからこそヨハネはつぎのように言った。

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

愛は神からであるもので、愛する者はみな、神から生まれ神を知っている。愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛することのない者は神を知りません。

—ヨハネの手紙一四章七節以下—

×

×

「わたし」と「あなた」と「かれ」と「それ」とに分別するのが自我であり、互いに対象化し、対立的に見るのが自我の働きである。そこには敵や味方や友等の存在が措定そていされる。したがって、「わたし」が、敵である「あなた」のために命を捨てることが出来るか、否か、ということが問われるなら、それはいまだ自我の働きの内の事である。人間の根源にたぎっている命のそこでは「わたし」・「あなた」・「かれ」・「それ」等の対象関係はなく、ただ命のたぎりとしての「わたし」だけである。つまり、敵も味方も友もない。これこそ、人間の存在と存在一般の根源にたぎる創造的な命そのことであり、本来的な人間の有り様がここにある。この事は人間の理想像や理念ではなく、人間存在の根源にある原事実なのである。だから、「友のために命を捨てること、これ以上の愛はない」という言表いひあはせしは、「敵を愛しなさい」という言表しと同様、根源からの発言として当然の事実なのであって、決して理想像や理念などではない。しかし自我の世界で受け取るとき、それは理想像や理念となり、「出来るか、否か」という受け取り方になる。

×

×

存在の根底から発言されるそれは、存在の根底に躍動する大いなる命の事実の証示なのである。人の自我を超えて自我を包む超越と同時に内在である創造的な有り難き命の原事実なのである。それは存在一般の願いや努力以前に恩恵として躍動している命のたぎりなのである。自我を超えた根源にこの命がたぎり、自我を支えて許し活かしている。これが本来的なわたしだったのであ

る。

×

イエスは「親切なサマリヤ人」の話をなさった後で、次のように言われた。行ってあなたも同じようにしなさい。

×

—ルカによる福音書十章三七節—

この物語りについては、すでに幾度も述べて来たが、イエスは「あなたも困っている人を見て、けて助けよ」と命じられたのではない。

人はときとして「自分の十字架を負うてイエスに従う」ということを、イエスの自己犠牲的な行いに倣<sup>なま</sup>って、自分も苦しみを負うことだと思ふ。勿論、イエスに倣<sup>なま</sup>って善行することは良いことである。

しかし、イエスが「親切なサマリヤ人」の話で提示したことは、イエス自身が見て、知って、生きた「その生の根底」についてである。それは、人間の本来の生<sup>なま</sup>の在り方そのものである。

そもそも、イエスが提示する人間本来の在り方のそこでは、わたしも、あなたも、かれも、それ、も無い。なぜなら、既に述べてきたとおり、本来の「わたし」の場では「日常的なわたし」を超えた、「ただのわたし」しかないのである。これこそが「本来のわたし」である。

これは理屈ではない。理解出来ないことを語っているのではない。誰でも謙虚になると自然に見えて来る「当たり前前のこと」だ。

×

×

このことについて、キリストが下さる「自由」という、使徒パウロの次の言葉、即ち、

兄弟たち、あなた方は、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉の罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。

—ガラテヤの信徒への手紙五章一三節—

手がかりにして考えてみようと思う。それに先立って、一般的な「自由」とはどんな状態なのかを、少し見ておきたい。

それは「枠がない」こと、「限定されていないこと」だと言える。その意味で「不自由」とは「枠があること」「限定されていること」である。と、するならば、どの場合でも私たちは「枠にはめられず、限定されない」自由が欲しいと願う。ところが、自分の生きざまをよく観ると、すべての事について「枠をはめ、限定しながら」生きているのが自分であることに気づく。

×

×

例えば、私たちは自分を、自分の枠のなかにはめ込んで生きています。具体的に言うと、「わたし」は「あなた」ではない、という枠で、自分を他人に対して囲っており、また、「わたしは私」であって「あなたではない」、と「わたし」を「あなた」に対して自己を限定している。そして、その枠や限定を基本にして、「わたしのもの」とか「あなたのもの」などと分別して生活している。これは、「わたしは私である」又は「わたしは、私によって私である」と自己主張していることに他ならない。さらに言うなら、それは他人に対して強固な枠を作り自分を守ろうとしている姿であり、消極的な他者拒否の姿である。この姿こそエゴイズム(利己主義)の在り方だと言えよう。

このように、私たちは「自由」はよいことだ、と願いながら、実は自分を枠にはめ、限定して、まことに不自由な在り方をしている。そして恐るべきことは、「わたしは私だ、お前ではない」という得手勝手な思いを持つことを、「自由な生き方」であるかのように思い込んでいる。

×

×

しかし、人間は社会的な存在として他者と関わりを持たずに生きて行けない。そこで人は他者に対して扉を開け交わろうとする。でも、その扉は自分に利益をもたらす限りにおいて開ける扉であって、不利益になると見るや、忽ちにして扉を閉めて自分の囲いの中に逃げ込んでしまう。そのような人間関係は極めて利己主義的關係である。このような利己主義を基盤にした人間関係

によつて構成される社会では、互いの欲望がぶつかりあつて激しい争いが常に起こる。この人間の現実の姿を聖書は次のように語る。

何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いが起こるのですか。あなたがた自身の内部で争い合う欲望が、その原因ではありませんか。あなた方は、欲しても得られず、人を殺します。また、熱望しても手に入れることができず、争つたり戦つたりします。

—ヤコブの手紙四章一節以下—

人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、<sup>そそのか</sup>唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。

—ヤコブの手紙一章一四節—

×

×

結局、人間は自由を求めて不自由となり、ますますエゴイストと化して、「あなた」や「それ」との関係を自分の欲望満足的手段としてしまう。そこでの人間関係は偽善の渦が生じ修羅場となっている。

このような人間の現実を使徒パウロは次のように指摘した。

正しい者はいない。一人もない。悟る者もなく、神を求める者もない。皆迷い、誰もが空しいものとなった。

善を行う者はいない。ただ一人もない。彼らののは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮まむしの毒がある。口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すに速く、その道には破壊と悲惨がある。

彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない。

—ローマの信徒への手紙三章一〇節以下—

×

×

もう一度、イエスが提示された「親切なサマリヤ人」の話に注目しよう。強盗に襲われ瀕死の状態で助けを求める者の前を三人の旅人が通った。二人の宗教家は見ないふりをして通り過ぎた。しかし三人目に来た「親切なサマリヤ人」は彼を助けた。一体、彼らの何が違っていたのだろうか。それを先に述べた「自由」という視点から考えるなら、二人の宗教家は、まことに「自由」な生き方に立ち、一方、親切なサマリヤ人は本当の「自由」に立っていたといえる。

二人は、自分という「わたし」の枠に留まり、その「わたし」から、倒れている者を「あなた」として見た。つまり、自分の枠から自分は一步も出ないままで、倒れている人を他者として対象化して眺めた。そして、自分の枠のなかの論理で、助けるべきか否かを思いめぐらし、その

結果彼らは通り過ぎた。結局彼らの関心は、倒れている者に向けられないで、自分の枠の中での論理に従ったのである。つまり、すべての思案を「自分という枠」に縛られ、限定された中で行われたのである。だから、彼らの関心は自分であって、倒れている人の存在は無視されている。彼らは自分の枠に縛られて自己限定している「不自由人」だったのである。

×

×

ここで、特に注目したいことは、彼らが口にする神も悪魔も、善も悪も、救いも滅びも、聖書も掟も、信仰も礼拝も、すべてが「自分(わたし)」という枠の中で解釈され受容している教義なのであって、結局、「わたしの思い、考え」に基づく「わたしの枠内」での納得事なのである。それは独りよがりであり、独善だといえる。そして、その事実で自分で気づいていようといまいと、それは「偽善」である。

×

×

一方、サマリヤ人は、倒れている「その人を見て真底から同情し近寄り」出来る限りの介抱をした。その様子はまさに「我をわすれて」の介抱であった。そのとき、彼は「あなた」を対象化することなく「わたし」が「あなた」になり「あなた」が「わたし」になったのである。「わたし」の枠が無くなり、同時に「あなた」の枠も無くなってしまった。彼はどのような枠からも開放されたところに立っている。いかなる自己限定もそこにはない。彼が立ったその場では、宗

教も信仰も聖書も掟も善も悪も滅びも救いもその他一切が消えて無くなっている。彼は「本当の自由人」になった。そして、その場に生かされることが「本来のわたし」なのである。これこそが「行つてあなたも同じようにしなさい」とイエスが提示されたことであつて、「同じ行いをせよ」ということよりも、「その場に立て」「その場にたぎる命を悟れ、そしてその場に生かされよ」ということである。これこそが「キリストがくださる自由」なのである。

×

×

そこで、もう少し「親切なサマリヤ人」に注目しながら「キリストがくださる自由」の根拠について考えてみよう。

「キリストがくださる自由」と言つても、その根拠を深く悟らないなら、その言葉を語る者も聞く者も、なにやら分かつたようで、その実、何も分からないのではないだろうか。

×

×

愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るものであつて、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。……いまだかつて神を見た者はいません。私たちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内であらうされているからです。

—ヨハネの手紙Ⅰ四章七節以下—

ここでヨハネが提示したことは、「神は愛である」ということである。

わたしたちはこのヨハネの言葉を「神が私たち人間を愛する」と受け取り解釈してしまう。そこから「私たち人間は神に愛されている者なのであります」という教えが声高に叫ばれるようになる。勿論、「神がわたしたち人間を愛してくださる」というメッセージは有り難いことであって何ら拒否することはない。しかし、「神は愛である」とは神についての説明ではなく、神それ自体が愛であるということであって、その結果「神は人を愛しておられる」という事が人の側で言い得るのである。つまり神は愛である、ということが一であって、神は人間を愛して下さる、と言うことは二なのである。この第一の事柄と第二の事柄とを混同してはならない。

×

×

もし、第一と第二の事柄とを混同してしまうと、人間が互いに愛し合うのは、神が人間を愛して下さるからだ、ということになる。それをもっと強調して言うと、「神が人間を愛して下さるのだから、人間は互いに愛し合うべきだ」ということになってしまう。

しかしヨハネは、人間が互いに愛し合うのは、神が愛であるからだ、という。つまり、人間が互いに愛し合うその愛は、神から出るのであるとヨハネは言う。

したがって、人間が互いに愛し合うということの究極の主体は神なのであって、決して人間が

考えて生み出したことではないのである。

なぜなら、人間が生み出す愛は、何時も利己的であつて、どれほどの大義名分を作り又は掲げても、その愛はしよせんはエゴイズムの産物にしかすぎない。

×

×

「わたしたちが互いに愛しあうならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛が全うされているのです」とヨハネが言うとき、それは「神は愛である」という「神の愛が人間の生と行動の究極の主体である」という事を語っているのである。それは、人間の行為はその人間の行為にほかならないが、同時に神の愛がその人間を通して、人間として行為しているのである。このことを使徒パウロは次のように言った。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるので  
す。

—ガラテヤの信徒への手紙二章二十節—

「神は愛である」とは、人間的自我を越えている。にもかかわらず、「神は愛である」を人間の自我で抱え込んでしまうなら、忽ちにして「神は愛である」という神についての説明になつて

しまい、「神は人間を愛してください。ありがたや、ありがたや」となり、「だから、神に愛されてる者として相応しく、清く、正しく愛をもって生きねばなりません」という、偽善いっばいの聖人が理想的人間とされてしまう。キリスト教の世界でいうなら、まさに模範的クリスチャンとして称賛されることになる。

×

×

イエスが問題とされたことの一つは「偽善」ということである。偽善の言葉の意味は適当な解説書にゆずるとして、偽善の問題性の根っこはエゴイズムにある。人間のエゴ(自我)で神の愛や神の教えを抱え込むとき全ては、「白く塗った墓」となる。イエスは言われた。

律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。白く塗った墓に似ているからだ。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れに満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている。

— マタイによる福音書二三章二七節以下 —

偽善の持つ問題性はただの「嘘つき」ということではなく、すべての事柄、人間の生と行動の究極の主体を自我においているということである。自分の存在の根底が自我であるということ

ある。

×

×

自我の関心はいつも自分自身に向けられている。「あなた」と関わる時も、「彼」と関わる時も、「それ」と関わる時も、勿論神と関わる時もやはり関心は自分自身であり、すべては自分のためである。自我の世界には自分以外に何も無い。自分をいかにすれば美しく、清く、善なるものに見せるか。自分の欲望をどの様にすれば満足出来るか、という一点だけに関心が向けられる。そのためには神も仏も利用する。ときとして自己犠牲的行為も厭わない。自分の魂を地獄ではなく、天国へ行かせるためなら、善に励み、悪を避け、善き教えを遵守しよう、神にも仏にも帰依しようと思う。すべては自分のためなのだから、と思う。

「神は愛である」という提示を、自我に於いて抱え込むなら、それは、神に対する義務的倫理的な克己の中に神の働きを見ることになる。その結果、「クリスチャンは〇〇であらねばならない。××であるべきである」など、立派な教えで自分を縛ってしまう、まことに不自由人になってしまう。この畏に落ち込んでしまったのが「親切なサマリヤ人」の物語に登場する二人の宗教家のセンセイ達だった。

しかし倒れているユダヤ人に親切の限りをつくしたサマリヤ人は、自分が正しく清く生きるための神の意志を自分の前面にたてない。またそれを教え語った聖書等も立てない。彼は、どのよ

うな客観的な規範としての神や聖書も自分の行動の前提に立てない。彼は「神は人を愛しておいでになるので、どの人にも善を行え」という意味での神の愛など前提に立て、それに従おうとしたのではない。

×

×

では、親切なサマリヤ人をその行動に促したものは何だったのか。それを言うならば、彼の自我を越えた深みにたぎる命が彼を活かしめたのである。イエスはそれを「神の支配」と言った。イエスは「神の支配」を次のように説いている。

神の支配は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。

—マルコによる福音書四章二六節以下—

これはまことに明解な提示である。人の側の、即ち人間自我の一切の配慮または思惑とは関係なく、「ひとりでに」（オートマテイ——自発的に、自然に——）土が実をむすばせる事態を「神

の支配」なのだといエスは言われる。これこそ「命のたぎり」なのである。神の支配についてイエスは次のようにも提示している。

神の支配を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きい枝をはる。

—マルコによる福音書四章三〇節以下—

神の支配は人間自我を越えた深みで、人間の生と行動の究極の主体としてその命をたぎらせている現実なのだ。その命の現実を「神は愛である」とヨハネは言った。その愛なる命は、創造であり、保持であり、完成としてたぎっている。この場合も創造するもの、保持するもの、完成するもの、という客観化され、対象化されたものではない、それは創造という命のたぎり、保持という命のたぎり、完成という命のたぎりそのことなのである。しかしそれは大地に実を結び、鳥の巣を作らせるほどに具体化して現成してくる。

「親切なサマリヤ人」はまさに自我を越えた深みにたぎる命を素直に行じたのである。この事態をパウロは「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きて

おられるのです」と語った。(ガラテヤ二章二〇節)サマリヤ人はまさに「キリストが与えてくださる自由」を生きたのである。彼はその時、神に活かされ神を知ったのである。そして、その生の現場が「創造に於ける自然」である。

#### 四 イエスとパウロとわたし

結局、イエスは何を説いたのだろうか。種々論議されて来たようだが、福音書でイエスが「神の支配」を語ったとする立場にわたしは共感する。

イエスは神の支配を説くことで、神と人間との関係を示し、人間の在り方を身をもって行<sup>ぎょう</sup>じた。

一方、原始キリスト教団は、イエスが説いた「神の支配」を直接継承し発展させたのではなく、イエスは神の子キリスト(救い主)であると宣べ伝えた。

では、両者は異なる教えの立場なのかというと、そうではなく、イエスと原始キリスト教団の

信仰は、人間の本来性は神の救いの働きから生きるところにある、という点で基本的に一致している。

以下に於いて、もう一度イエスが提示したことと、原始キリスト教団が説いたこととの違い、そして、両者の一致点とを概略し、新約聖書が教える人間の真実の在り方を確認して、「わたしの問い続けてきたこと」を一応終了したいと思う。

×

×

イエスが説いた「神の支配」の場を、私は「命のたぎり」と見性し、その超越的な構造を「創造に於ける自然」と表言してきた。そして、創造における自然は、神自らの超越的大決定であり、人間によるいかなる基礎づけ、即ち「統一化」を必要とせぬ神の「然り」と「否」なる「命のたぎり」に担われている神の原決定の場である。この「事実」のところでは、未だ宗教も哲学も科学も文化も芸術もない。これらは、超越的な「事実」が一とするならすべて二にしかすぎない。すべて「二なる事」は相対的な事である。にもかかわらず、超越的な事実を無視して相対的な二なる現象を一とするなら、それは「相対の絶対化」または「相対による統一化」であつて、超越的な事実からの脱落、即ち「創造における自然」に即していないという意味での「罪」である。以上の事柄をイエスは次のように簡潔に言われた。

あなたがたは、「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出る。

—マタイによる福音書五章三七節—

また、次のようにも語られた。

神の支配は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのである。

—マルコによる福音書四章二六節以下—

×

×

さて、「創造における自然」にはそれなりの構造がある。その構造は「愛」である。この場合は「愛」という原理があるのではない。また本質としての「愛」ではなく、「動としての愛」または「事としての愛」なのである。働きとしての愛は、すべてのものを自然に結び合わせる事において、すべての個を生かし、それ自体「統合動体」と成る。愛はすべての「個」が秘めている可能性を個々との関係において完全に生かすことによつて、具体的な「統合動体」を現成させる働きであると言える。だからイエスは次のように語った。

わたしがあなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。……あなたがたが出掛けて行って実を結び、その実が残るようにと……わたしがあなたがたを任命したのである。……互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。

—ヨハネによる福音書一五章十一節以下—

したがって「神」とは「創造における自然」なる「場」そのものとして統合動体として働く愛だといえる。だからヨハネは神について次のよう語ったのは納得出来る。

いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛しあうならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。

—ヨハネの手紙一四章一二節—

×

×

イエスは「神の支配を説いた人」ではなく「神の支配を自ら生きた人」である。「それを説く」とは、それを解釈説明することであり、説く者とそれとの関係は間接的且つ主客関係である。

したがって「説く者」は説くそれを对象的化する。しかし「それを生きる」とは、「それ」との関係は直接的であり、主客前、主客末分であり、「それ」自体であるゆえに、対象化して解釈説明する言語を必要としない。だから、イエスは神の支配と人間との関係について次のように言われた。

神の国(神の支配)は、見える形では来ない。「ここにある」「あそこにある」と言えるものでもない。実に、神の国(神の支配)はあなたがたの内にあるものだ。

×

—ルカによる福音書一七章二〇節—

×

「神の支配」は固定化されたものでなく「動」であり、「命のたぎり」としての躍動の現場それ自体である。その構造は「創造に於ける自然」であり、その内容は「愛」であることはすでに述べたとおりである。イエスはそのような神の支配の働きを言行した人(行じた人)である。イエスにおいては神の支配とご自身とは不可分なのである。だから次のように自分を示された。

イエスは言われた。「わたしを見た者は、父(神)を見たのだ。

—ヨハネによる福音書一四章九節—

わたしと父(神)とは一つである。

—ヨハネによる福音書十章三十節—

父(神)よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいる。

—ヨハネによる福音書一七章二一節—

×

×

イエスは「空の鳥をよく見なさい」「野の花がどのように育つか注意して見なさい」と山上の説教で提示された。これは、ただ、生物学的に又は植物学的な観点から行う観察を勧められたのでもないし、ロマンチックな感情で語られたのでもない。イエスが提示されていることは、あなたの日の前で「鳥が飛んでいる」「花が咲いている」という、まぎれもなく現実に起こっている。「この出来事」それ自体から、言わば「根源の声」を聞きなさい、ということである。「注意してみなさい」「よく見なさい」とは、「深く認めなさい」「深く知りなさい」「深く学びなさい」ということ、一口で言えば「悟りなさい」という提示である。それは、花や鳥を物として対象化して見ることで、見る者の内に起こる思考や感情ではない。美しいとか、価値がどれほどのものだとかいうことではなく、その鳥を鳥として現成させ、花を花として現象させているその命自体と一つになることによって、花を、鳥を見て聞く直接経験が、そのものの根源の声を聞く、知る、学ぶ、悟るといふことなのである。

したがって、イエスがこのような提示をなさるとき、もし、私たちが、「花や鳥は、目に見えない神さまに養い、育てられているのです」などという陳腐な事柄の提示として受け取ってはならない。ましてや、「だから、全能の神は存在するのであります」などという人間の思い上がった推理を理屈してはならない。

イエスが「空の鳥を見よ」「野の花を見よ」と私たちに提示なさるのは、大いなる命のたぎり  
を直接経験しなさい、創造に於ける自然なる愛が現成している、「それぞれ！あなたの内にも外にも大いなる命のたぎりが躍動しているではないか。目のある者はその事実を見なさい。耳のある者はその響きを聞きなさい」と示しているのである。その意味で、厳密に「神を証し」している「大いなる命を証言している」とは、そのような直接経験の場のことを言うのである。

×

×

イエスが花や鳥を語るとき、花や鳥だけを語っているのではない。イエスはその語りにつづいて「今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってください。まして、あなたがたにおいてはなおさらのことではないか」と言われる。(マタイによる福音書六章二五節以下)ということは、この世に現成している、一つ一つの現象の全てが、花や鳥と同じく、命のたぎりの根源の声、創造に於ける自然の愛の証言なのである。だから、その命の根源のところでは、「思い悩みはない」のである。イエスは言われる。

だから、自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。……あなたがたのうちだが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。……何よりもまず、神の支配と神の義とを求めなさい。

—マタイによる福音書六章二五節以下—

これは何という明解なイエスの言葉だろうか。実に神の命のたぎりは、人の命と共に光り輝き、その愛は満ち満ちているのである。この第一の命の現場に開眼しないままに、この世の一切の理屈を弄するなら、それは空しい。人間の本来の生は神の救いの働きから生きるところにあるのだ。神と人との関係は神が一であり人の生は二なのである。しかし、そうでありつつ、神と人の命は同時である。

×

×

イエスが提示し、自ら行じた生は「神の支配」である。それは神の「命のたぎり」その事の直接的な生にほかならない。

イエスは言う。

神の支配は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼寝起きしているうちに、種は芽を出し成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのである。

—マルコによる福音書四章二六節以下—

「神の支配」は、「ひとりでに実を結ばせる」場だとイエスは言う。それは、人間の思い計らいに先立ち、存在の根底として躍動している神の命のたぎり、ということである。その「命のたぎり」をイエスは「わたし」として行じられ、その場から直接発語された言葉が次のような語りである。

わたしは道（真実の生き方）であり、真理（本当のもの）であり、命（生きる原動力）である。

—ヨハネによる福音書一四章六節—

わたしを見た者は、父（神）を見たのである。

—ヨハネによる福音書一四章九節—

父（神）がわたしの内におられ、わたしが父（神）の内にいる。

—ヨハネによる福音書一四章一〇節—

わたしと父(神)とは一つである。

—ヨハネによる福音書一〇章三〇節—

はつきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、わたしはある。

—ヨハネによる福音書八章五八節—

×

×

したがって、イエスは歴史的な存在としての「私」を「わたし」と言ったのではなく、命のたぎり<sup>ぎ</sup>りを直接行じている命その事を「わたし」と言い表した。つまりイエスに於ける「私」はこの世に限定されて存在する「個」のことであり、「わたし」とは個を超越した命のたぎりとしての「超個の個」のことである。そして福音書が言う「キリスト」とは「超個の個」に他ならない。

その意味で歴史的な存在としての個なるイエスは、同時に「ひとりでに実を結ばせる」命のたぎりとしての超個の個を直接行じ、且つ証示された故に、聖書がイエスをキリストと称するのは当然だと言える。

ところが、個(私)なるイエスと超個の個(わたし)としてのキリストとを、厳密に区別しないで混同してしまったのが、当時のユダヤ教団であった。彼らは、イエスが、自分は神である、と言ったという理由で宗教裁判にかけ、「ユダヤ人の王(神)」と自称した者という処刑理由を記した

板を取り付けた十字架にイエスを掛け、律法違反の大罪人として神の名により公衆の面前で殺害した。

×

×

イエスを処刑した当時のユダヤ教の指導者達は、イエスが説いた律法(旧約聖書)が秘めている根源の命が何であるかを、直接経験しないまま、聖書の文字に執らわれ、伝統的な形式を固守して、イエスが言う「わたし」でなく、まさしく「私」の宗教信仰を自我の信念として振り回し「聖書、聖書、律法、律法」と事あるごとに言い、その祭儀を行う独善に陥っていた。イエスは彼らの聖書理解の根本的な誤りを次のように指摘された。

あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、研究している。ところが、聖書は、わたしについて証しをするものだ。

—ヨハネによる福音書五章三九節—

それにしても、このような状況が、今日の「キリスト教界」にも、まったく無い、とは言えないように思う。少なくとも自分自身の信仰の在り方を厳しく省みたいと思っている。

×

×

さて、イエスが説いた「神の支配」の場を、私は「命のたぎり」と見性し、その超越的な場を「創造に於ける自然」と言表してきたことは既に述べた。が、ここで確認しておきたいことは、「神の支配」とは、神がいて、その神が支配する、と言う意味ではない。神の支配その事が神なのである。その意味で神は、超越的な「場」である。と同じように「命のたぎり」も、神の命があつて、それがたぎっている、というのではなく、神それ自体が「命のたぎり」なのである。

×

×

「命のたぎり」の超越的な場の構造は「創造に於ける自然」である。そして「命のたぎり」の超越的な場の芯ともいうべき働きが、「動としての愛」である。だから聖書は「神は愛である」と言う。(ヨハネの手紙Ⅰ四章八節)この場合も、神がいて、その神が、愛を持っている、というのではなく、神そのものが動としての愛、という意味での場であることは言うまでもない。したがって、その「場」にあつては、すべての個をそのまま結びあわせ、各個を満開させることで全体を完成させる。その働きが「創造に於ける自然」なのである。だから聖書は「愛は、すべてを完成させるきづなである。」と言う。それは「愛は、すべての個を結びあわせ完成へと創り上げる」という意味である。

×

×

—コロサイの信徒への手紙三章一四節—

命のたぎりの超越的な場の芯は、このように動としての愛である故に、すべての個をそのままで結び合わせ、各個を満開させることで全体を完成させ、「統合動体」を生み出す。

「統合動体」とは、私の造語だが、それは旧約聖書、創世記一章の最後にある、「神はお創りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。」という、その「極めて良かった」状態のことを「統合動体」というのである。ちなみに「極めて良かった」とは、神の創造の「目的にかなっている」（関根正雄著作集一三卷六二頁）ということである。

旧約聖書創世記は「初めに、神は天地を創造された」という語りで始まり、以下は創造の業が記されてある。その結果人間の創造をもって完成する。完成された具体的な様子が「エデンの園」である。「エデン」とは「喜び・楽しみ・幸福」を意味し、「幸福の園、又は樂園」というのが「エデンの園」であるが、その樂園たる理由は、そこにあるすべての個が個でありつつ、自然に一つとなって機能し、「安定した全体となっている動体」としての状態、即ち「統合動体」というところにあるのである。つまり、命のたぎりの愛の場にあつては、強いてでもなく、強いられてでもなく、自ら「統合動体」となるような場が、「創造に於ける自然」なのである。したがって神の創造とは「命のたぎり」の芯である「愛のたぎり」が創造へ向かわせ「統合動体」を完成させずにはおかないのである。だから「極めて良かった」という意味が「神の目的にかなっている」というのは、そのことである。実に、神の「創造」とは、このような畏敬すべき事実で

あり、しかも、そのような「創造」が、この世のいかなる「こと」「もの」に先立って、神の大決定としての「初め」なのである。ゆえに、「初め」は時間の初めではなく、存在の根源的な有り様の、「有るべくして有る」畏敬すべき、真に有り難き「初め」なのである。ならば、万物はこの「神の初め」の息吹として響きの一音、又は、その息吹の響きの反響として現成しているものとして今々在るのだといえよう。

「初めに、神は天地を創造された。」という響きは今、天地に及んでいる。この有り難き響きを聞いていた信仰の人は、次のように賛美を神に捧げた。

もろもろの天は神の栄光をあらわし、

大空はその御手のわざをしめす。

この日、言葉をかの日につたえ、

この夜、知識をかの夜におくる。

語らず言わず、その声聞こえざるに、

そのひびきは全地にあまねく、

その言葉は地の果てにまでおよぶ。

創世記が語る「エデン（喜び）の園」は理想の場ではない。また目的の国でもない。または、神によって世の終わりに実現される場のことでもない。「エデンの園」を現成した「命のたぎり」は、無条件に、今われわれの却下に漲みなぎっているのだ。

だからイエスは言われる。「空の鳥をよくよく見なさい」「野の花を注意して見なさい」彼らは飛んでいる、咲いている。神の命のたぎりは、あそこにある、ここにあるというのでなく、現に今ここに、お前の足元に、あなたの真つ只中に躍動し、すべてを、その関わりに於いて、そのものとして生かしつつ、全体としてまとめ、統合動体として完成するべくある。その命に与かつて、お前も今生かされている。イエスは言われた。

わたしの父（神）は今なお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。

—ヨハネによる福音書五章一六節—

イエスの生をあえて一言で語るなら、「父なる神の支配を素直ぎょうに行じた人」と言える。一方、同じく使徒パウロの生をあえて一言で語るなら、「復活のキリストを行じた人ぎょう」だと言えよう。すでに何度も述べて来たとおりイエスは、一切に先立って「神の支配が」すでに及んでおり、

その根源的命のたぎりによって「それ」が「それ」として成り立たしめられていることを提示することにより、一切の事柄の存在理由と意義とを提示された。そして、その根源的な事実としての「神の支配」に目覚めることなく、またその命を直接経験することなく、人がどれほどの知恵と知識を用いて人生や世界を美しく構築しようとしても、それは虚しく終わることを示された。

一方、使徒パウロは、イエスが生きた根源的な命のたぎりを「復活のキリスト」に於いて直接経験し、「その命を我が命」「我生きたるはキリスト」と化して、その「復活のキリスト」を素直に自ら行<sup>ぎょう</sup>じ証<sup>し</sup>した。

×

×

イエスやパウロが直接対峙したことは「律法主義的な生き方」である。聖書に於ける「律法」とは神と民との契約であり、結果的には民（人間）に対する神の要求、つまり民（人間）は律法を学び、行うことによって神の義と命を得ることができるといふように理解され、最後には「律法は神と人との仲介者の役割を担うように」なった。したがって、そのような「律法」を徹底遵守する者が神に義とされ、救われる条件となり、その律法を生きたる支えとする者を「律法主義者」と言う。

イエスもパウロも「律法」を否定したのではない。そうではなく、律法の文字をどのような形にせよ、「守れば神に義人」と認められ、且つ「神による救いに与かることが出来る支え」とす

る人間側の意識と認識のあり方の問題性を「律法主義者」の中に見い出したのである。

本来聖書に於ける「律法」は、神の支配、根源的な命のたぎりから生まれ来て、その命を証示しているものである。にもかかわらず、律法の根源にある命のたぎり、神の支配の事実をそのまま素直に覚ることなく、律法の文字面にこだわり、それを形どおりに守ることによって義人たり得ようとする条件にすり替えてしまったのである。つまり神の言葉を自我の言葉で抱え込んでしまったのである。その結果、神の根源的な命の証しとしての律法が、人の自我から発する言葉と化してしまった。

×

×

自我とは、自分は自分によって自分である、とする自分(当体)のことである。つまり、自分の主人は自分であり、自分の最後の拠り所は自分である、とする当体のことである。しかし、本来の自我は、神の支配の内にあり、神の命のたぎりを根源として成り立っているものである。にもかかわらず、自我を根源的な出発点となすなら、その意識と認識が生み出すものは、結局、自我が勝手に構築した幻想にしかすぎない。それらは根っこを欠いた徒花<sup>あだばな</sup>である。まさしく律法主義者とは、このような自我の内に神と律法を抱え込み、神殿や祭儀を作り上げ、それを生きる根拠としたのである。だからこそ、イエスは律法主義者を「あなた方は偽善者だ」と言われた。「偽善者」とは、本当の自分の根拠を知らないままで、自我の計らいで勝手に自分の生きる根拠、根

源を構築し、それに寄り掛かって生きる者のことである。だからこそイエスは、聖なる祭儀が執り行われ、「神います」と畏敬された巨大で華麗なエルサレムの大神殿を指さし「わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない神殿を建てる」と言われたのである。(マルコ福音書一四章五八節)

×

×

イエスにとって、それがどれほど偉大な宗教であり、どれほど立派な文化であり、また政治、技術、経済、法律であつても、本当の根柢を欠いたままで、ただの人間自我の造り出したものであるなら、それらは所詮は陽炎かげろうのように、やがては虚無の中に消え去るものだったのである。このイエスの視点は、今日の宗教や文化、教育、政治、技術、法律等々のあり方への根源からの警醒けいせいでもある。

×

×

このような律法主義が秘めている重大な問題性を、使徒パウロは、自らの律法主義的生に於いて発見した。新約聖書にあるパウロの書簡は、律法主義的生の問題性と其処からの救済を自らの信仰告白として語っている。

しかし今は、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から開放されています。そ

の結果、文字に従う古い生き方ではなく、「霊」に従う新しい生き方で仕えるようになっていくのです。

—ローマの信徒への手紙七章六節—

×

×

それにしても、使徒パウロの信仰はヘブライ的伝統を引き継いでおり、したがって彼はキリスト教的、神学的思考の基礎を築き、その信仰を通してキリスト論的に人間そのものの在り方を語ったのである。新約聖書にある彼の書簡のなかで、特に注目する一つはローマの信徒への手紙七章七節以下であると思われるので、以前にも少し記したことがあるが、再度、そこでパウロが提示していることがらに少し目を向けることで、パウロの信仰について語ることを一応終わろうと思う。(とは言え、ローマ書七章は、その解釈をめぐって古来多くの専門家が論議を重ねてきた大切な箇所であって、私には専門的に論議をするだけの知識はない。しかし、一人の信仰人としての生き方を明確にする意味から、わたしなりのパウロの信仰理解を語ることで、わたしの福音理解、また信仰告白としたい。)

×

×

ローマ書七章に於いて問題になっていることは、そこでパウロが語る「私」ということがパウロ自身のことか、それとも人間一般のことなのか、ということ。さらに、彼の「告白」が律法の

下にあった信仰以前の在り方に関わることなのか、それともキリスト者となってからのことなのか、ということである。その解釈をめぐる古来から現代に至る多くの解釈者の立場について、私は解説する立場にはない。興味のある方はそれぞれの専門家の著書で学んでいただきたい。

問題は、お前はどうかなのか。ということである。わたしの理解は以下の通りである。

パウロがここで提示していることは、律法が「むさぼるな」と命じるのを受けて、「そうだ、むさぼるまい」と律法を守ろう、律法に従おうと懸命に努力する、その努力そのものが、実は「更なるむさぼり」となっている、というのである。つまり、律法を守ろう、律法に従おう、とする「律法遵守」こそ、神の前に自分の努力で自分を「義」としようとする「自我高揚」にほかならず、その結果ますます人間は「むさぼり人間」と化してしまう。例えば律法を守れない人間を蔑み、守っている自分を誇る傲慢人となり、鼻持ちならない高慢人と化してしまう。

とすると、とても奇妙なことになってしまうのである。つまり「律法」を守っても、かえって人間は神から離れ「自我高揚」の我執に凝り固まった者、つまり「罪」の権化となるばかりだということである。ときとして模範的な「信仰の人」がこの高慢者になっていることがある、が本人はそのような自分に一向に気づかず、自分は最も神の救いの近くにいるのだという思い込みの幻想に生きている。

×

×

ローマ書七章の問題は、さらなる重大な問題に連なっていくことになる。それは、パウロの信仰理解、福音理解の中心になっている「贖罪」と「義認」との関わりである。義認とは、神が与えた律法を完全に守る者を神が「義人」と「認める」ことである。しかし、それを守れない者は罪人と断罪される。そこで、守れない者に代わって神の前に「贖いの供えもの」として御子イエスを十字架に掛け、その死によつて「罪」から人間を救いだし、義人と認められるように神ご自身がしてくださった、ということが「福音」の内容である。つまり、律法を完全に守れなかった罪人の欠けたるところを神が御子イエスの十字架の死によつて充たす「贖罪」によつて、「義人」と認められた、ということである。これは明らかに、「律法完全主義」が貫かれたことになる。この前提のもとで「贖罪」と「義認」とが成り立っているのである。また「福音」と「律法」という構図も「律法完全主義」を前提にして成り立っているのである。

しかし、一方でパウロはすでに見たとおりローマ書七章で語っていることは、「律法」を完全に守っても人間は救われないのだ、と言うのである。

つまり、パウロは「贖罪」と「義認」・「律法」と「福音」という信仰理解に立っていないながら、一方に於いてその信仰理解の前提を根本から否定するような「律法否定」を語る。これはパウロにおける矛盾である。私たちはパウロに対してどのような信仰的な前提や偏見も抱かず、パウロを素直に見て、その矛盾をどのように締めくくるといふことを、パウロ自身の信仰理解の中で